

アズールタンペーン

まさ (GPB)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アズールレーンの短編集

※pixivにも同内容の物を投稿しています。

目次

不審者じゃないアーク・ロイヤル……？	1
指揮官と赤城の隠し子!? (加筆修正版)	18
赤城が天城ちゃんを甘やかす話だったはずの物	23

不審者じゃないアーク・ロイヤル……？

まだ夏の暑さが残るある日の母港。

書類作業がある程度片付けた指揮官は昼食を済ませた後、息抜きの為に学園内を散歩していた。そこで彼はある光景を目にする。

「ん？ あれはコメットとクレセントか……？」

物陰に身を潜めながら何かを見ている二人を見つけた彼は、二人に声をかける事にした。

「お前ら、こんなところで何してるんだ？」

「ひゃあ!？」

「あ、指揮官」

突然話しかけられた事に驚いてクレセントは声を出す。対照的にコメットは普段通りに指揮官に応じる。

「びっくりした……じゃなくて、何しに来たのよ!？」

「休憩だよ。そっちこそ、二人して隠れて何見てたんだよ。ってか、シグニットの姿はどうした？」

いつもはCクラスの三人でよく一緒にいるはずだが、今日はそのシグニットの姿が見当たらない。

「それが……」

と、コメットが先程まで見ていたところに視線を戻す。指揮官もそれに倣って目をやった。

視線の先には指揮官が声をかけるまでのコメットとクレセントと同じように、隠れながら何かを見ているアーク・ロイヤルがいた。

「アークロイヤル……？ アイツがまた何かやらかしたのか？」

「今はまだああして見てるだけなんだけど……」

——それいつも通りじゃねえか。

「アークロイヤルさんが見てる部屋なんですけど、あの中にシグニットがいるんです」

コメットにそう言われた指揮官は、改めてアーク・ロイヤルが中を覗いている部屋を見る。

「あの部屋って、確か資料室……ってか図書室だったよな？」

「そこにシグニットがどんな用があるのか、実は私達も知らないんだけどね……とにかく、そこにシグニットが入ってくのが見えたから私達も入ろうと思ったら、既にアークロイヤルさんがいたってわけ」

クレセントの説明に、指揮官は「なるほど」と返す。

その時、物陰から図書室——の中にいるはずのシグニット——を見ていたアーク・ロイヤルが突如「危ないッ！」と叫んで図書室に走って行く。それと同時に中から大きな物音と、続けてシグニットがアーク・ロイヤルの名を呼ぶ声が聞こえた。

「おい、俺達も行くぞ！」

「はいっ！」

「ちよつと!？」

三人が図書室へ足を踏み入れると、そこには沢山の資料が散乱している床に倒れるシグニットと、その上に覆いかぶさりながらも気を失っているアーク・ロイヤルの姿があった。

「シグニット大丈夫!？」

「このロリコンめ、遂にやりやがったか……」

「これは海軍部に通報ね」

コメットはシグニットを心配しているが、指揮官とクレセントは気絶しているアーク・ロイヤルへ冷たい視線を向ける。

「うう、アークロイヤルさんが庇^{かば}ってくれたから、うちは大丈夫だけど……」

「庇^{かば}った？ コイツがか？」

指揮官はアーク・ロイヤルを引き剥がしながらも怪訝^{けげん}そうな表情を浮かべた。

「うん、うちの事を助けてくれたの……」

シグニットは立ち上がりながら、この状況へ至った経緯を話し始める。



「えへへ、実家じゃ読めなかった本がこんなにあるなんて幸せだよ……」

表情を綻ほころばせながらそう言うシグニットは、目の前に並ぶ多くの本に心を奪われていた。そんな中に一冊のある本を見つける。

「あつ、これ……昔読んだ本だあ！」

偶然、上段に見つけた懐かしいハードカバーの背表紙とタイトルに、思わず彼女の手が伸びた。

しかし、

「あ、あれ……うぐぐ……！」

ぎっしりと詰まった本棚からその本を引き抜けず、シグニットは力の限り引つ張る。少しして目当ての本が動き始め、それが分かった彼女はより力を込めて引き抜いた。

その時――

「危ないッ！」

「え？ きやつ!？」

誰かの声が聞こえて倒されたかと思つた瞬間、突如としてシグニットの視界には自身を押し倒した人物――アーク・ロイヤルの姿と、彼女の上に降り注ぐ大量の本が見えた。

「ぐっ……！」

「アークロイヤルさん!？」

アーク・ロイヤルはその身でシグニットを護るように覆い被さる。何冊かの本が庇かばっている彼女の身体に当たり、その衝撃は思わず声が漏れてしまう程であった。

「あ、アークロイヤルさん大丈夫……?？」

「つつ……シグニットちゃんこそ大丈夫かい?？」

「うちは大丈夫だけど……」

シグニットの無事を確認したアーク・ロイヤルは彼女の手を取って起き上がろうとする。

しかしこれで終わったと油断して、立とうとしていたアーク・ロイヤルの後頭部へ、残っていた最後の一冊が落下してきた。

「がつ……！」

「ふえ!？」

ハードカバーの本が頭に直撃したアーク・ロイヤルはシグニツトの上に倒れ込み、そのまま気を失ってしまう。

丁度そのタイミングで図書室へ指揮官とコメット、クレセントの三人がやって来たのだった。



シグニツトの話聞き終えた三人は散らかってしまつた本を戻して、アーク・ロイヤルを医務室へと運んでいた。

「ヴェスタル、いるか?」

「はい。あら、指揮官とCクラスのみんなに……アークロイヤルさん? どうしたんですか?」

出迎えたヴェスタルは、医務室にやって来た四人——更に指揮官に背負われているアーク・ロイヤルを見て不思議そうな顔を浮かべる。

「詳しい事は後で話すが、アークロイヤルがちよつと事故で気絶してな。ちよつと診てやって欲しい」

「分かりました」

背負っていたアーク・ロイヤルを指揮官がベッドに寝かせると、ヴェスタルはすぐに診察を始めた。その様子を指揮官が覗くと、

「どうだ?」

「うーん、特に大きな外傷は見当たりませんね。頭に出来た大きめのたんこぶぐらいでしょうか?」

「あとで背中も診てやってくれ」

「どうしたんですか?」

「ハードカバー本の雪崩から、シグニツトを庇つたんだと」

指揮官の言葉に、シグニツトが思わず恥ずかしそうに俯いた。

「なるほど、そう言う事だったんですね」

その様子を見たヴェスタルは納得して頷く。と、指揮官は自分の腕時計に目を向ける。

「やべっ、休憩時間終わってる! すまんが報告とかは後でよろしく

！」

そう言つて彼は医務室を出て行つた。

「行つちやつた……」

「指揮官も忙しいですからね。あ、シグニットちゃんも怪我がないか、念の為診るので服を脱いでくださいね」

「うう、そんなく……」

× × ×

昼の出来事から少し経つて――

「は？ アーク・ロイヤルの様子がおかしい？」

診察を任せたヴェスタルの報告を聴いた指揮官の反応は、怪訝な顔を見せた。

「どうやらアーク・ロイヤルは無事に目を覚ましたようだが、ヴェスタルの報告によると万全ではないらしい。」

「アイツがおかしいのはいつもの事だろ？」

「そんな事まで言う指揮官に、思わずヴェスタルも苦笑いを返してしまふ。」

「流石に所属しているKAN—SENの事をそう言うのはどうなんだ？ 指揮官」

話を聞いていた秘書艦——エンタープライズもつい口を出してしまつた。

「だつてアークロイヤルだぞ」

「確かにそうかもしれないが……」

「それが、いつもの感じじゃないんです」

「いつもの感じじゃない？」

ヴェスタルが言ういつもの感じも大概変——と言うより変質者であるが、それが常態化しているアーク・ロイヤルに限って言えばそうではない彼女は逆におかしい、と言う事であった。

「その、指揮官が直接現状を見た方が良いかと……」

「いいのか？」

指揮官はエンタープライズを見る。

「そうだな。仕事は今日の分は粗方あらかた終わっているし、残りは任せてくれ」

「私も出来る限り、エンタープライズちゃんのお手伝いをしますのので」
ヴェスタルとエンタープライズの二人にそう言われては、指揮官も渋々であったが納得してアーク・ロイヤルの様子を見に行く事にした。

「分かったよ。じゃあ何かあつたらすぐ呼んでくれ」

「ああ」

「はい」

医務室の前に来た指揮官は、扉を開ける前にノックする。いつもと違うアーク・ロイヤルというものに「一抹いちまつの不安を抱えながら。

「アークロイヤル、入ってもいいか？」

「閣下？ 別に構わないぞ」

——今の応答は普段通りか……。

気を取り直して医務室に入ると、そこには運んだ時と変わらぬ格好で立っている彼女がいた。

「もう動いていいのか？」

「まだ背中や頭は痛いが、特に問題はないぞ」

そう口にするアーク・ロイヤルに指揮官は安心する。

しかし、

「それよりも閣下。シグニットちゃんは大丈夫だろうか？ よく覚えていないんだが、確か私は彼女を助けようとしたはずなんだ」

この言葉に、指揮官は多少の違和感を覚えた。

彼女がシグニットを助けた際に頭を打って気を失ったのは事実だ。それはシグニット本人からも聞いています。

違和感の正体はそこではない。

——駆逐艦の話なのに、アークロイヤルの言動が普通過ぎないか……？

「閣下？」

「あ、ああ……それなら大丈夫だぞ。シグニットはお前のおかげで怪我一つない」

「そうか、それは何よりだ」

類笑みすら浮かべながら答えるアーク・ロイヤルに、指揮官の違和感はより強くなっていく。

——いつもなら駆逐艦が無事、と言うだけでもっとテンションが高くなるはずだが……こうなったらこれを使ってみるか。

そう考えた指揮官は、懐からある物を取り出す。

「……ところでアークロイヤル、これをどう思う？」

「これは——」

彼が見せたのは、昼寝をしているラファイヤカツシンの写真だった。普段のアーク・ロイヤルならこれで興奮するはずだと——

「閣下……人の趣味にとやかく言うつもりはないが、こういうのを持ち歩くのは感心しないぞ？」

「——は？」

アーク・ロイヤルから放たれた言葉に、指揮官は衝撃のあまり手にしていた写真を落としてしまった。

執務室に戻った指揮官は未だに先程の出来事が信じられずにいた。戻ってくる途中でヴェスタルとすれ違ったが、彼はその事に気を回せない程だった。

「指揮官、大丈夫か？」

エンタープライズは声をかけながら、コーヒーを淹れたマグカップを彼に差し出す。

「エンタープライズ……」

「アークロイヤルの事は私もヴェスタルから聞いている。それはそれで良かったのでは？」

「良かったってなあ……」

彼女の言い分も分からなくはない。普段のアーク・ロイヤルは駆逐艦を影から——時には堂々と——見守っているが、その様子は傍から

見れば不審者そのものである。それを不安に思っている者もいれば、アーク・ロイヤル自身も一度それが原因で海軍部に通報されそうになった。

「駆逐艦が絡まず、黙っていればカッコいいのに」とか「クール美女だと思ってたのに」とか以前から言われてたじゃないか」

「お前も容赦ないな……」

「秘書艦として何度も手を焼かされているからな」

そう言いながらエンタープライズは笑う。それにつられて指揮官も笑みを浮かべる。

「ははっ、確かにそうだな……でも——」

「うん？」

「——でも、やっぱり俺の知ってるアークロイヤルは実は可愛い物好きのロリコンだから、戻ってもらわねえと調子が狂うわ」

そう言ってコーヒーを一気に流し込むと、一枚の指令書を掴む。

「とりあえず、これで様子見するか」

「明日のパトロール任務だが……いいのか？」

「危なくなったらすぐに下げる。一応、お前も一緒に行くぞ」

エンタープライズは頷く。

「前衛は？」

「何か反応があるかもしれないから、駆逐艦にしよう」

「分かった」

こうして指揮官とエンタープライズは明日の任務の予定を立てていった。

× × ×

翌日。

エンタープライズとヴェスタルに、少し時間をずらしてアーク・ロイヤルと共に来てもらうように頼んだ指揮官は、港でアーク・ロイヤル達を待っている間に、パトロール任務の前衛として選んだCクラスの三人に昨日の事を聞いていた。

「で、俺が行った後に目覚めたアークロイヤルはああなつてたと」「うん……うちのせいだつて思つて泣いちゃったんだけど……」「そしたらアークロイヤルさん、シグニットに泣かなくても平気だつて言つて頭を撫でたのよ」

——やつてる事ただのイケメンじゃねえか……。

「その時のアークロイヤルさん、優しく笑つてました」

シグニットやクレセントはもちろん、あのコメットですら不安げな表情で話す。

「……これは俺の我が儘だが、この任務がアークロイヤルが元に戻る切っ掛けになればと思つている」

彼はそう言つて三人の顔を見る。

「ま、いつものアークロイヤルさんつて駆逐艦の事になるとちよつと気持ち悪いけど、今のアークロイヤルさんはなんかもつと気持ち悪いし、私も協力するわ!」

「何もそこまで言わなくても……」

クレセントの啖呵たんかに、コメットは苦笑を浮かべる。

「うちは……」

シグニットは胸の前で両手を強く握る。

「うちのせいでアークロイヤルさんはあんな風になつちやつたんだから、うちも頑張るよ指揮官……!」

「もちろんコメットちゃんも協力しますよっ!」

「三人とも……ありがとう」

感謝と共に指揮官は頭を下げた。

「お待たせしました」

ヴェスタルの声が聞こえた方を見ると、彼女とエンタープライズ、アーク・ロイヤルの三人の姿が見えた。

「アークロイヤル、調子はどうだ?」

指揮官が問いかける。するとアーク・ロイヤルは海に向かって走り、地を蹴つて大きく飛ぶと同時に、その身に艦装を纏まとう。

「身体の痛みもない。いつでも行けるぞ!」

海上に降り立ってそう言った彼女はニツと笑みを見せた。

「……よし。ではこれより、近海のパトロールを始める。各員出撃！」



クレセントを先頭に、コメット、シグニット、アーク・ロイヤル、エンタープライズ、ヴェスタルの順番で隊列を組み、さらにその後方を指揮官が乗る艦船が続く。

前衛の三人は周囲を警戒しながら進み、後続のエンタープライズが偵察の為に数機の艦載機を展開させる。

「しかし、閣下とエンタープライズまで一緒に来て良かったのかい？」

警戒はそのままにアーク・ロイヤルが尋ねる。

「母港からそこまで離れていないし大丈夫だ。それに向こうにはウェールズやベルファスト、クリーブランド達もいる」

「緊急の事態なら私だけでもすぐに戻る」

エンタープライズも周囲に目を向けながら答える。

「今のお前を戦闘に出してもいいかどうかを、俺とエンタープライズが確認しなきゃならんってのが一番の理由だな」

「別に私は問題ないと思うのだが……」

「……自分じゃ気付けない事もあるだろ」

アーク・ロイヤルに聞こえないよう口にした指揮官だが、思わずその表情は険しいものになってしまう。

「ん？ 閣下、今何か言ったか？」

「いや——」

「セイレーンの艦隊を発見！」

指揮官の言葉を遮って、艦載機を飛ばしていたエンタープライズから敵発見の声が上がった。全員がすぐに戦闘態勢に入る。

「規模は？」

「……一隻の戦艦型を中央に、前を重巡洋艦型が二隻、後ろを軽巡洋艦型が二隻、さらにその周囲を駆逐艦型が四隻」

——この辺りにしては随分な規模だな……。

「戦艦型が旗艦だな……まだ周りにもいるかもしれないから警戒は怠るなよ！」

艦隊のそれぞれが「了解」と応えると、敵艦隊にも動きが見られた。「向こうも戦闘態勢に入ったな……駆逐艦二隻と重巡二隻が前に出たぞ」

「やってやるわ！」

「コメントちゃんも頑張りますよ！」

「う、うちも頑張るっ！」

エンタープライズの報告を聞いた前衛の三人は主砲を前方に向ける。

「アークロイヤル、本当に問題ないんだな？」

「全く、閣下は心配性だな」

ライフルのような飛行甲板にソードフィッシュ中隊の発進準備をするアークロイヤルは、指揮官——が乗る艦船——に笑って見せた。

「……よし、全艦戦闘用意！ ヴェスタルは甲板で待機だ！」

「はいっ！」

指揮官の号令で、ヴェスタルを除いた五人は戦闘速度でセイレーン艦隊に迫る。

前衛の三人は敵艦隊が主砲の射程内に入ると、まずは煙幕を展開した。前進してきていた駆逐艦型と重巡洋艦型が砲撃してくるが、煙幕によって正確な狙いではなく、その尽くを外していく。

そんな中、クレセントは魚雷の発射態勢に入った。

「先制魚雷行くわよッ！」

「任せて！」

「う、うんっ！」

クレセントの合図で二人も魚雷発射管を展開させる。

「いつけえーッ！」

煙幕で視界は不明瞭だったが、展張前の位置と敵艦の進行方向を予測していた三人は、ほぼ同時に魚雷をそれぞれの方向へと発射した。

果たして煙幕の向こう側から、二つの爆発音が聞こえてくる。

「当たったあ!」

「喜ぶのはいいけど油断しないでよ、シグニット!」

「そう言うクレセントも、顔が嬉しそうだよ?」

「こ、コメット! そんな事言わなくていいから!」

三人がそんなやり取りをしていると煙幕の効果が切れたようだ。

視界が開けると、駆逐艦型と重巡洋艦型が一隻ずつ魚雷で轟沈しているのが見えた。

「よし、まだまだやるわよッ!」

クレセントが先陣を切つて敵艦隊に突っ込む。その後をコメットとシグニットも続いて行つた。

「流石、指揮官の下で古参なだけはある」

Cクラスの三人を後方から見守るエンタープライズは上空から艦載機に偵察させながら、彼女達の活躍に感心する。

「そっちはどうなんだ、アークロイヤル?」

「準備は万端だよ。ソードフィッシュ中隊、出撃!」

エンタープライズの質問に答えたアークロイヤルは、撃ち放つようにソードフィッシュを発進させた。目標は敵の旗艦である戦艦型。

「意思を持たない量産型とは言え、頭を潰してしまえば!」

ソードフィッシュ隊を敵陣の左翼から侵入させて戦艦型へと全機の航空魚雷を投下する。そのままであれば直撃するコースだ。

しかし、

「な……!」

アークロイヤルは驚愕する。

その理由は戦艦型の後方にいた軽巡洋艦型と、さらにその後ろにいた駆逐艦型が、まるで戦艦型をソードフィッシュの魚雷から護るように進出してきたのだ。

発射された魚雷は進路の変更が出来ない。果たして軽巡洋艦型と駆逐艦型は魚雷によって沈められたが、戦艦型はその二隻によって護られ未だ健在であった。

「すまないエンタープライズ、こちらは再装填まで時間が掛かる」

「ああ、後はこちらで——」

エンタープライズが「任せろ」という言葉は、セイレーンの戦艦型による砲撃音によってかき消された。

「くっ！」

「厄介だな……！」

狙われた二人は即座に回避行動を取る。敵弾は先程まで彼女達が立っていた場所の近くに着弾して、大きな水柱を上げた。

アーク・ロイヤルとエンタープライズが避けているその間に、戦艦型はもう一基の砲塔を、主砲で駆逐艦型を沈めたCクラス三人に向ける。

「まずい！」

「アークロイヤル！ 待て！」

戦艦型の主砲が自分達に向けられているのを、駆逐艦型を沈めて重巡洋艦型に気を引かれているクレセント達は気付いていない。

「コメント、シグニット、次はあれ重巡行くわよ！」

重巡洋艦型の攻撃を避けながらクレセントは二人に標的を示す。

だが、

「クレセント！ 二人を連れて一度下がれ！」

突如として無線機から指揮官の叫び声が聞こえた。

「何よー！」

その声で動きが止まった三人に対し、戦艦型の砲撃が襲来する。

「きゃっ!?!」

「ふえええ!?!」

「間に合わなかったか……煙幕は使えないか!?!」

「まだ再装填が……！」

煙幕はまだ使えない。どうにか逃げようとするが、戦艦型はさらに三基目の砲塔で砲撃を始めた。それはシグニットを狙った夾ぎょう叉うし砲撃だった。

「シグニット！」

「逃げなさいッ！」

コメットとクレセントは叫ぶが、重巡洋艦型の砲撃もありシグニットは動けない。

そして、戦艦型がシグニットへ砲撃。それは直撃する弾道であった。

「っ！」

シグニットは覚悟した。

その時――

「うおおおおおッ!!!」

「アークロイヤルさん!?!」

敵弾とシグニットの間を割って入ったアーク・ロイヤルは、手にしていたライフル型の飛行甲板を迫り来る砲弾へと差し向ける。

「妹たちはやらせないッ！」

そう言葉にした彼女に、戦艦型の砲弾が直撃した。



「う……ここは……」

目覚めたアーク・ロイヤルは、辺りを見回す。

「医務室……?」

まだ頭がぼんやりとする状態ではあったが、自分が寝ている場所が母港にある医務室のベッドであったのは理解出来た。

「目が覚めましたか？」

「ヴェスタル……」

「今、指揮官を呼んできますから、そのまま寝てくださいいね？」

ヴェスタルはそう言っただけを浮かべると、一度医務室を出て行った。

しばらくすると指揮官とヴェスタル、そしてCクラスの三人が入ってくる。

「大丈夫か？」

「まだ少し頭が痛むけど、大丈夫だぞ」

昨日と同じように答えるアーク・ロイヤルに、指揮官は彼女が出撃前と変わっていないのではないかと不安を覚えた。

「それよりも閣下、私が被弾してからどうなったんだ？」

——記憶はちゃんとあるか。

「閣下？」

「あ、ああ……それなら、すぐにエンタープライズが全部片付けた。その後、こいつら^Cククラスが俺の船まで運んで、ヴェスタルに診てもらいながら戻って来たんだよ」

「そうだったのか……皆には迷惑をかけてしまったな」

彼女は申し訳なさそうに言う。

「その、アークロイヤルさん……」

と、今度はシグニットがおおずとおおずとアーク・ロイヤルに声をかける。

「うちを助けてくれて……ありがとう……!」

「私と閣下の妹を助けるのは当然の事! シグニットちゃんが無事ならそれでいいんだ!」

などと力強く口にするアーク・ロイヤルに、彼女を除いた全員がその場で顔を見合わせた。

× × ×

それから数日が過ぎ——

執務室にやって来たKAN—SENの報告によって、またしても彼女が問題行動をしていると知らされた。

「はあ、アイツはまた……」

「以前はああじゃないと調子が狂うと言っていたのは誰だったかな?」

「うぐ……」

痛いところを秘書艦であるエンタープライズに突かれた指揮官は、言葉を詰まらせて苦い顔をする。

「ま、今日はそこまで書類も多くないから行ってくるというだろう」

「しよがねえかあ……」

彼はそう口にするのと席を立つた。

報告された場所に向かつてみると、目的の人物を早速発見する。

「おい、アークロイヤル」

指揮官が呼びかけると、その人物——アーク・ロイヤルは肩をびくりと震わせて振り返った。

「か、閣下!？」

「お前、また駆逐艦にちよつかい出そうとしてたんじゃないだろうな?」

「ち、違うぞー！ 私はただ遠くから観察——眺めていただけだ!」

弁明する彼女に思わず指揮官は溜息を吐く。

——あの時のアークロイヤルのまま、元に戻さない方が良かったんじゃないだろうか……。

「またアークロイヤルが不審な行動をしてるって報告が来てるんだぞ。少しは自重しろ」

「う、すまない……」

そう諭され、流石の彼女も肩を落とす。

「……これやるから、それで我慢してろ」

そう言つて、懐から以前にも見せた昼寝をしている駆逐艦の写真を何枚か手渡した。

「閣下……感謝する!」

「おう、分かったから騒ぐなよ」

恐らく自室に向かうであろうテンションの高いアーク・ロイヤルの背中を見送りながら、指揮官はそう声をかける。

「ところでご主人様」

「……ベルファスト」

「この写真の入手経路はどちらから?」

「……グリッドレイから押収した」

「私の目をしっかり見てから仰つてくださいませ」

指揮官と赤城の隠し子!? (加筆修正版)

「指揮官!」

執務室の扉を破壊しそうな勢いで開けて飛び込んできた重桜の正規空母、加賀。その様子は、普段のクールな言動からは想像もつかないほど慌てていた。

「ど、どうした加賀……?」

「あら、加賀?」

「あ、あ、あ……」

彼女は偶然にもこの執務室にいた一人のKANSENの姿を見て固まってしまう。

「加賀? おーい?」

「どうかしたのかしら……? 加賀、指揮官様が困ってるわよ?」

それは加賀と同じ重桜の正規空母であり、その加賀と共に一航戦として名を馳せる赤城であった。

「明らかにお前を見て固まったぞ、赤城」

赤城と指揮官を交互に見ながら微かに震えて口をパクパクとさせる加賀を二人は不思議に思う。

「……赤城、加賀に何かしたのか?」

流石の指揮官も、尋常ではない加賀の様子から赤城に目を向ける。「し、指揮官様!」 この赤城の事を一体なんだと思ってるらしやるのですか!?

「何って、意外とポンコツな重桜のやべー奴筆頭?」

「なあっ……!?!」

二人が加賀の存在を忘れそうになっていると、執務室に更なる来訪者がやってきた。

「ここが執務室です。少し外で待ってて欲しいのです」

そう言って執務室に入ってきたのは重桜所属の駆逐艦、綾波だ。

「綾波じゃないか。どうした?」

「指揮官に会いたいという子がいたので連れてきたのです」

淡々と彼女は答える。

「俺に？ それはご苦勞。で、その会いたい子つてのは？」

「外にいるです。さ、入ってくるです」

そう言つて綾波がそのKAN—SENを招き入れる。

「……」

呼ばれて執務室に入ってきたのは、指揮官の隣にいる赤城を小さくしたような子供だった。

「……は？」

その小さい赤城を見た指揮官と赤城は、偶然にも同じリアクションをしてしまう。と同時に、指揮官は先ほど加賀が慌てていた理由を何となく察した。

——あれはどう見ても小さい赤城……だよな？ また明石の仕業か？ なんにせよ、変に大きな騒ぎになる前に……。

「し、指揮官様……これは夢でしょうか……？」

「赤城……？」

指揮官が赤城に目を向けると、彼女はあわあわと指揮官と小さい赤城に視線が行ったり来たりを繰り返している。

「わ、私……いつの間に指揮官様との子供が……？」

「お前は何を言ってる!？」

身体の大きさは違うものの、自分とほとんど同じ姿の存在が現れて混乱したのか、突然そんな事を口走った赤城に思わず指揮官も驚く。と、そこに運悪く、

「指揮官様と……誰の、子供ですって……？」

重桜の最新鋭空母である大鳳が執務室の扉を開けていた。先程の赤城の発言を聞いた彼女は、この世の終わりであるかのような顔をしている。

——あ、これは終わったな……。

この状況に、思わず指揮官は他人事のような感想を抱く。

「あらあ？ 大鳳、見て分からない？ 指揮官様とこの赤城の愛の結晶が、あなたには見えないのかしら？」

「赤城はなんでそう大鳳を煽るの？」

「ッ……！ この女狐え!!」

「大鳳もなんでそんなに煽り耐性ないんだよっ!？」

指揮官は赤城と大鳳による争いを避けるのに必死だ。しかしこの火種に油を注いだのは――

「この子分は私のものよ？ あなた達には触らせないわ」

小さな赤城の一言だった。その上、彼女は指揮官の傍まで近付いてきたかと思うと、大きい赤城と大鳳を煽るような表情で彼の膝の上に飛び乗った。

「えつと……」

――今この子、俺の事を子分って言ったよな……？

「指揮官様……？」

指揮官が自身の膝の上でふんぞり返っている存在に戸惑っていると、ゆらりと赤城と大鳳の二人が揃って向かってくる。

――あかん。

「綾波!」

「鬼神の力、味わうがいい……!」

素早く動いた綾波が、赤城と大鳳の襟首を掴んだ。

「は、離しなさいよ!」

「指揮官様! まさか、それが小さい私とは言え、指揮官様はそんな小娘に誘惑されませんわよね!？」

「綾波、二人を寮まで連れて帰ってくれ……俺はこの小さい赤城と話がある」

「了解です」

「あ、あなた駆逐艦のくせに力強すぎませんっ!？」

「指揮官様、指揮官様あああつ!」

綾波は抗議を続ける二人を引きずって執務室を後にした。

「加賀、平気か?」

「――はっ! 私は一体何を……」

どうやら衝撃が強すぎて加賀は立ったまま意識が飛んでいたらしい。

「今、綾波が赤城達を空母寮まで連れて行った。お前も行ってこい」
「あ、ああ……そうさせてもらおう」

指揮官に言われるがまま、加賀はふらつきながら重桜の空母寮へと向かった。

その背中を見て、まだ大事にはなっていないが面倒な事にはなったな、とは思いう指揮官であった。

——でもどうせすぐ騒ぎになるんだろうなあ……。

特ダネ大好きなあのパラッチの耳に入った日には、すぐに新聞の記事が出回る事だろう。



そして翌日。

小さな赤城——赤城ちゃんの艦隊への配属が正式に決定した。しかしそれを全体に発表するよりも前に、案の定例のパラッチが書いた新聞に先を越されてしまっていた。

ただ単に新しい仲間が増える、という内容ならまだいい。だが記事の内容はとんでもないものだった。

「……」

まず最初の問題はその見出し。

『衝撃！ 指揮官と赤城の隠し子か!? 艦隊の新しい仲間、赤城ちゃん!!』

デカデカとそんな文字が並んでいた。

——隠し子とか書くなよ……絶対分かってやったな、アイツ……あー、絶対後で面倒な事になるわ……。

指揮官は頭を抱えそうになるが、一つ息を吐き出して記事に目を通していく。

いつの間に取材や撮影をしたのか、赤城ちゃんの写真や綾波に連行された赤城のインタビューまで掲載されている。そのインタビューにはこう記されていた。

『初めて見た時は、私の知らない間に指揮官様との子供が出来たのか

とそれはもう喜んだものです。でも、それは間違いだった……あの小娘、私の指揮官様に向かつて子分って言ったのよ!? その上、まるで指揮官様を自分の椅子のように扱って……!』

——これ、二人を合わせたらまずいのでは……? いや大鳳とかもいるけど……。

「はあ、これからしばらくは胃薬が手放せなくなるか……」

商機の勘がいい明石や不知火なら、その胃薬一つでも指揮官に売りつけようとするだろうが、今の彼はその事は考えないようにした。

——赤城はいつもの事だから、今更あれをどうしようとなんて思わん。つてか無理だし。

「かと言って、赤城ちゃんの方も言って聞く感じじゃなさそうだしなあ……」

そう口にした指揮官は療養中で不在である一人のKAN—SENを思い浮かべていた。

「早く帰ってきてくれ……天城……」

巡洋戦艦、天城。

それは赤城が唯一頭の上がない相手である姉だ。彼女がいる手前であれば、流石の赤城も多少は大人しくなるだろう。

だが、その天城は現在この母港にいない。

「まあ天城がいたら、それはそれで俺もしつかりせにやらんけどな……。よし……!」

気合を入れ直した指揮官は、放送用の機材のスイッチを入れて全力で叫んだ。

「青葉ア!! 見出しわざとなの分かってんだからア!」

赤城が天城ちゃんを甘やかす話だったはずの物

指揮官は目の前で繰り広げられている光景に頭を抱えていた。

「はい天城ちゃん、美味しいあんみつですよ♪」

「はむ、んぐんぐ……」

「うふふ」

指揮官の視線の先には、あまり見せる事のない柔らかい笑顔の赤城と、差し出された甘味を美味しそうに頬張る小さな天城——天城ちゃんがいた。

「むぐむぐむぐ」

「慌てなくてもあんみつは逃げませんよ」

「天城は慌てている訳ではありません。あんみつが美味しいせいです」

赤城は、日頃から姉である天城を敬愛していた。その天城が療養の為に艦隊を離れていたある日、新しく艦隊に天城ちゃんが加わる事となった。

それからというもの、赤城は天城が長い期間いない反動からか、天城ちゃんを甘やかしくついていた。

「……………」

それも執務室で。

「指揮官、まさか姉さまは今日もあの調子なのか？」

「ああ、そうだよ……」

半ば諦めたように、加賀の問いに応じる指揮官。その答えを聞いた彼女も、やれやれと言うように首を振った。

「姉さまにも困ったものだ。だが——」

「ん……？」

「気持ちは分からなくもない」

そう言って加賀はニヤリとする。

「お、おい、加賀……？」

「お前の気持ちは分かる。だが姉さまの気持ちは分かる。この意味が

分からぬ指揮官ではないだろうか？」

彼女はそのまま赤城と天城ちゃんの元へ歩を進める。

「加賀もそっち側だったか……」

「ふふ、私も天城さんの事は尊敬しているんでな」

——なんでそれが天城ちゃんを甘やかす事に繋がるんだ。

指揮官はそんな言葉が出そうになったのを飲み込んで、加賀が赤城の隣に腰を下ろすのを見て代わりにため息を漏らすのだった。

それからしばらくして。

「指揮官、入るよ〜」

「失礼致します、指揮官様」

執務室の扉を開けて、二人のKAN—SENが入ってきた。

これまた重桜に所属する軽巡洋艦の長良と巡洋戦艦の比叡であった。

「どうした、二人とも」

「えへへ、天城ちゃんにお菓子でもどうかなんて思って、持ってきたの」

「私はそれに合うお茶でも……と思いましたが」

彼女たちはそう言うのと、すぐに一航戦と天城ちゃんの所へと行ってしまった。

「二人もだったか……」

指揮官は苦笑いを浮かべると、集まっている彼女らに目を向けて、本当に天城ちゃんは重桜のKAN—SEN達から愛されているのかなど実感した。

——方向性はちよつとアレだが……。

あんみつを食べ終え、次は長良からのお菓子に手を付けている天城ちゃん。その様子を赤城、加賀、比叡の三人も微笑ましく見ている。

——まあ美味しそうに食べるあの姿を見てたら、ああなるのも無理はない、か……？

「ふふ、指揮官様もどうぞ」

気が付けば、比叡が指揮官の分のお茶を持って来ていた。

「あ、ああ。ありがとう」

彼はお茶を受け取ると、何とも言えない表情で口を付ける。

「何かお悩み事でも?」

比叡は分かかって聞いてるのであろう事は指揮官にも分かった。

「……いや、なんでここなんだろうなって」

「ふふ。きつと赤城さんは指揮官様とも、天城ちゃんとも一緒にいたいんですよ」

そう言われてしまったのは、彼も強くは言い返せない。

「それに、ちゃんと赤城さんも秘書艦としてのお仕事もされているのでしよう?」

「そうだな……」

実際、彼女の言う通り赤城はああして天城ちゃんを甘やかしながらも、仕事はきちんとなしていた。それも完璧にやるのだから流石の一言に尽きる、というものである。

指揮官の視線の先で、天城ちゃんを甘やかしながら笑っている彼女にとつて、この時間は大事な息抜きなのだろう。

——恐らく、指揮官様が無理していないかとか、他の子達が指揮官様に言い寄って来ないかを見張る為とかあるとは思いますが……それは言わない方がいいでしょうね。

幾ら戦艦である比叡とて、余計な事を言つて赤城に睨まれるような真似は避けたかった。

——とにかく。

「でしたら、指揮官様も一緒に如何ですか?」

彼女はそう言つて、指揮官に微笑みかける。

それを見て、それから赤城や天城ちゃん達の姿を見た彼は、

「……分かったよ」

と言つて席を立つのだった。